

半七捕物帳

吉良の脇指

岡本綺堂

青空文庫

極^{ごくげつ}月の十三日——極月などという言葉はこのごろ流行らないが、この話は極月十三日とおおしだいと大時代に云った方が何だか釣り合いがいいようである。その十三日の午後四時頃に、赤坂の半七老人宅を訪問すると、わたしよりもひと足先に立って、蕎^{そば}麦屋の出前持ちがもりそばの膳をかついで行く。それが老人宅の裏口へはいったので、悪いところへ来たと私はすこし躊躇した。

今の私ならば、そこらをひと廻りして、いい加減の時刻を見測らって行くのであるが、年の若い者はやはり無遠慮である。一旦は躊躇したもの、思い切って格子をあけると、おなじみの老婢^{ばあや}が出て来て、すぐに奥へ通された。

「やあ、いいところへお出でなすつた」と、老人は笑いながら云った。「まあ、蕎麦をたべて下さい。なに、婆やの分は追い足^たしをさせます。まあ、御祝儀に一杯」

「なんの御祝儀ですか」

「煤^{すすは}掃きですよ」

大掃除などの無い時代であるから、歳の暮れの煤掃きは何処でも思い思いであつたが、半七老人は極月十三日と決めていると云つた。

「わたくしなぞは昔むかしもの者ものですから、新曆になつても煤掃きは十三日、それが江戸以来の習わしでしてね」

「江戸時代の煤掃きは十三日と決まっていたんですか」

「まあ、そうでしたね。たまには例外もありましたが、大抵の家うちでは十三日に煤掃きをする事になつていました。それと云うのが、江戸城の煤掃きは十二月十三日、それに習つて江戸の者は其の日に煤掃きをする。したがつて、十二日、十三日には、煤掃き用の笹竹を売りに来る。赤穂義士の芝居や講談でおなじみの大高源吾の笹売りが即ちそれです。そのほかに荒こうじん神じんさまの絵馬を売りに来ました。それは台所の煤を払つて、古い絵馬を新らしい絵馬にかえるのです。笹売りと絵馬売り、どっちも節季らしい気分を誘い出すものでしたが、明治以来すっかり絶えてしまいました。どうも文明開化にはかないませんよ。ははははは。そんなわけですから、わたくしのような旧弊きゆうへいじん人じんはやはり昔の例を追つて、十三日には煤掃きをして家内じゆう、と云つたところで婆やと二人ぎりですが、めでたく蕎麦を祝うことにしています。いや、年寄りの話はとかく長くなつていけません。さあ、

伸びないうちに喰べてください」

「では、お祝い申します」

わたしは蕎麦の御馳走になった。夏は井戸換え、冬は煤掃き、このくらい心持のいいことはない、老人はひどく愉快そうであった。きようは雪もよいの、なんだか忌に底びえのする日であったが、老人はさのみに恐れないような顔をしていた。やはり昔の人は強いと、私は思った。

そばを喰つてしまつて、茶を飲んで、それから例のむかし話に移つたが、かの大高源吾の笹売りから縁を引いて、頃は元禄十五年極月の十四日、即ち江戸の煤掃きの翌晩に、大石の一派が本所松坂町の吉良の屋敷へ討ち入りの話になった。老人お得意の芝居がかりで、定めて忠臣蔵のお講釈でも出ることに、私はひそかに覚悟していると、きようの話はすこし案外の方角へそれた。

「どなたも御承知の通り、義士の持ち物は泉岳寺の宝物になつて残っています。そのほかにも大石をはじめ、他の人々の手紙や短冊のたぐい、世間にいろいろ伝わっているようですが、どれもみんな仇討をした方の物ばかりで、討たれた方の形見かたみは見当たらないようです。上杉家には何か残っているかも知れませんが、世間に伝わっているという噂を聞きま

せん。ところが、江戸に唯一軒、こういう家がありました。今も相変わらず繁昌かどうか知りませんが、日本橋の伊勢町ちように河辺昌伯という医者がありまして、先祖以来ここに六代とか七代とか住んでいるという高名の家でしたが、その何代目ですか、元禄時代の河辺という人は外科が大そう上手であったそうで、かの赤穂の一党が討ち入りの時に吉良上野こうずけの屋敷から早駕籠で迎えが来まして、手負いの療治をしました。勿論、主人の上野は首を取られたのですから、療治も手当てもなかったでしょうが、吉良の息子や家来たちの疵を縫ったのでしよう。そのときにどういうわけか、吉良上野が着用の小袖こすめというのを貰って帰って、代々持ち伝えていました。小袖は二枚で、一枚は白綾しろあや、一枚は八端はつたん、それに血のあとが残っていると云いますから、恐らく吉良が最期さいごのときに身につけていたものでしよう。何分にも吉良の形見では人氣が付かないのですが、河辺の家では吉良の形見というよりも先祖の形見という意味で大切に保存していたそうで、これは擬まがい無しの本物だと言うことでした」

「たとい吉良にしても、元禄時代のそういう物が残っているのは珍らしいことですね」

「まったく珍らしいという噂でした。わたくしは縁がなくて、その河辺さんの小袖は見ませんでした。別のところで吉良の脇指わきさしというのを見たことがありました」

「いろいろの物が残っているものですね」

「それが又おもしろい。吉良の脇指がかたき討ちに使われたんですからね。物事はさかさまになるもので、かたきを討たれた吉良の脇指が、今度はかたき討ちのお役に立つ。どうも不思議の因縁ですね。しかしこのかたき討ちは、いつぞやお話し申した『青山の仇討』一件のような、怪しげなものじゃありません」

わたしの手がそろそろ懐ろへはいるのを横眼に見ながら、半七老人は息つぎに煙草を一服すった。

「はは、あなたの闇魔帳がもう出る頃だと思っていましたよ」

老人は婆やを呼んでランプをつけさせた。雪は降り出さないが、表を通る鮎ふな売りの声がしわす師走の寒さを呼び出すような夕暮れである。

「しかし、きょうは煤掃きでお疲れじゃありませんか」と、わたしはまた躊躇ちゅうちゆした。

「なに、あなた、煤掃きと云ったところで、こんな猫のひたいのような家うちですもの、疲れ程の事はありやあしません。煤掃きを仕舞って、湯にはいって、そばを食って、もう用はありませんよ。まあ、例のお話でも始めましょう」

老人は元氣よく話し出した。

「相変らずわたくしのお話は前置きが長くつて御退屈かも知れませんが、いつもの癖だと思ってお聞き流しを願います。嘉永六年十二月はじめの寒い日でした。わたくしは四谷の知りびとをたずねる途中、麴町三丁目へまわつて、例の助惣焼の店で手土産を買っていると、そこへ瓦版の読売が来ました。浅草天王橋のかたき討ちというのです。

この仇討は十一月の二十八日、常陸国上根本村の百姓、幸七の妹おたかというのが叔父の助太刀で、兄のかたき与右衛門を天王橋で仕留めた一件です。与右衛門は村の名主で、年貢金を横領したとか云う。著から、その支配内の百姓十七人が代官所へ訴え出ましたが、これは百姓方の負け公事になりました。その以来、名主と百姓とのあいだの折り合いが悪く、百姓方の組頭の幸七が急病で死んだのは、名主が毒殺したのだと云うのです。そこで、妹のおたか兄のかたき討ちを思い立って、女ひとり江戸へ出て、かのお玉ヶ池の千葉周作の家へ下女奉公に住み込んで、奉公のあいだに剣術の修行をしていました。その叔父の名は忘れましたが、これは国許で医者をしていたそうです。その叔父が十一月なかばに江戸へ出て来て、かたきの与右衛門が年貢納めに江戸へ来ると云うことを教えたので、おたかは主人から暇を取り、与右衛門が天王橋を通るところを待ち受けて、叔父の手引きで本意を遂げました。

しかし相手の与右衛門が確かに幸七を毒殺したという証拠が薄いので、このかたき討ちの後始末はなかなか面倒になりました。それにしても、女が往来で兄のかたきを討ったと云うので、その当座は大評判、瓦版の読売にもなったのです。こんにちの号外と同じことで、瓦版はずいぶん売れました。

今もその瓦版の読売が面白そうに呼びながら、助惣の店の前を通りかかると、ひとりの若い男が駈けて来て、引たくるよう一枚の瓦版を買って、往来のまん中に突つ立つたまま、一心不乱に読んでいます。それは年ごろ十八九の小粋な男で、襟のかかった半纏はんてんを着ていましたが、こんなことが好きなのか、よつほど面白いのか、我れを忘れたように一心に読んでいます。わたくしも商売柄、こんな事にも眼がきますから、これには何か仔細がありそうだと思いますが、別にどうすると云うわけにも行きません。買い物助惣焼を小風呂敷につつんで店を出ると、そこへ通りかかって、やあ、親分と声をかける者がありました。

見ると、それはこの近所に住んでいる馬秣屋まぐさやの亭主です。この時代には普通に飼葉屋かいばやとか藁屋わらやとか云っていましたが、その飼葉屋の亭主の直七、年は四十ぐらいの面白い男でした。御承知の通り、飼葉屋というのは方々の武家屋敷へ出入りして、馬秣を納めるのが商

売です。わたくしは前からこの男を識っているので、二つ三つ世間話などをして別れました。それから四谷の方へ行こうと思つて、麴町四丁目の辺まで行きかかると、あとから直七が追つて来ました。直七には連れがある、それは熱心に瓦版を読んでいた若い男でした。直七はわたくしを呼びとめて、まことに相済みませんが、そこまでお顔を拝借したいと云うのです。わたくしも連れの男に眼をつけていたところですから、二人に誘われて近所のようなぎ屋の二階へ連れ込まれました。これがこのお話の発端です」

二

飼葉屋の直七の紹介によると、麴町の平河天神前に笹川という魚屋さかなやがある。魚屋といつても、仕出し屋を兼ねている相当の店で、若い男はその倅の鶴吉というのである。親父の源兵衛は五年前に世を去つて、母のお秋が帳場を切り廻している。鶴吉はことし十九であるが、父の不在後は若主人として働いている。お秋は女でこそあれ、なかなかのしつかり者で、亭主の存生ぞんしょう当時よりも商売を手広くして、料理番と若い者をあわせて五、六人を使っている。

これだけならば、まことに無事でめでたいのであるが、ここに一つの事件が起こった。笹川には鶴吉の姉にあたるお関という娘があった。お関は容貌きりようも好し、遊芸ひと通りも出来るので、番町ちやうの御厩谷おうまやだにに屋敷をかまえている五百石取りの旗本福田左京の妾に所望された。左京の本妻は間もなく病死したので、妾のお関が自然に本妻同様の位置を占めて、屋敷内でも羽振りが好くなった。笹川の店が大きくなったのも娘のお蔭であるという世間の噂も、まんざらの嘘では無かつたらしい。これもそのまままで済んでいれば無事であったが、ことしの十月六日の夜に、主人の左京と妾のお関が他人に殺害された。下手人げしゆにんは中間の伝蔵であった。伝蔵は武州秩父の生まれで、あしかけ六年この屋敷に奉公していたが、この四月頃から女中のお熊と密通しているのを、お関が発見した。武家の習い、こういう者を捨てて置くわけには行かないので、主人と相談して、この八月かぎりでお熊を宿へ下げた。伝蔵も長ながの暇いとまとなるべきであったが、六年も勤め通した者でもあり、小才覚もあって何かの役にも立つので、これはそのままに残して置いた。

その伝蔵が十月六日の夜ふけに、主人の寢室へ忍び込んで、手箱の金をぬすみ出そうとするところを、眼をさました左京に咎とがめられたので、彼は枕もとの脇指をぬいて主人を斬った。つづいてお関を斬った。その物音を聞いて、家来の誰かが駆けつけて来るらしいの

で、彼は縁側の雨戸をあけて、庭口から表へ逃げ出した。

伝蔵は主人と妾を斬っただけで、なんの獲物もなかったのである。それでは何のために重罪を犯したのか判らなくなる。彼は度胸を据えて、隣り屋敷の高木道之助の門を叩いた。高木は主人左京の本家で、次男の左京が福田家の養子となったのである。伝蔵は高木家の用人に逢って、主殺しの顛末をつつまず訴えた。

「これが表向きになりましたは、五百石のお屋敷が潰れましょう。わたくしに三百両の金を下されば、黙って故郷へ帰ります」

主人を殺した上に、その本家へ押し掛けて行って、三百両の金をゆすろうとするのである。その凶太いのにも用人も呆れた。

しかしこの時代としては、これも強請ゆすりの材料になる。主人が家来に殺された上に、その家に相続人が無いとすれば、福田の屋敷は当然滅亡である。この一件を秘かくして置いて、どこからか急養子を迎えて、その上で主人の左京は死去したように披露すれば、なんとか無事に済まされない事も無い。そこへ付け込んで、伝蔵は本家から口留め金をまき上げようと企らんだのであった。

自分が人殺しをして置いて、その口留め金をゆするなどは、あまりに法外である。憎さ

も憎しと思いながら、前に云うような事情もあるので、用人も迂濶うかつにそれを刎ねつけることが出来なかつた。

「これは自分一存で返事なることで無い。しばらく待つていろ」

伝蔵をひと間に待たせて置いて、用人はそれを主人に報告すると、道之助もおどろいた。ともかくも左京と妾はどうしたか、その生死を見届けて来いと、家来を庭口の木戸から隣り屋敷へ出してやると、主人も妾も絶命したと云うのである。道之助は憤然として用人に云い渡した。

「その伝蔵という奴、主人を殺した上に大金をゆするなどは言語道断である。この上は福田の家の存亡などを考えているには及ばぬ。左様な不忠不義の曲者は世の見せしめに、召し捕つて町奉行所へ引き渡せ」

家来どもは心得て、伝蔵召し捕りに立ちむかうと、その姿はもう見えなかつた。彼もなかなか抜け目が無い。用人の返事を待つあいだも、絶えず屋敷内の様子に気を配つていて、形勢不利となつたのを早くも覺つたらしく、隙を窺つて忽そつそつ々に逃げ去つたのである。高木の屋敷の人々は自分たちの不注意を悔んだが、もう遅かつた。

高木と福田の両家から其の次第を届け出て、型のごとくに検視を受けたが、福田の家は

予想の通りに取りつぶされた。福田の家には子供がなく、家内は用人のほかには家来二人、中間三人、下女二人であったが、屋敷の滅亡と共に、皆それぞれに離散した。

正式の届け出があつた以上、町奉行所でも罪人伝蔵のゆくえ探索に着手したのは勿論であるが、それは半七の係り合いで無かつたので、今まで別に手を着けようとしなかつた。しかし彼も大体の話は聞いていた。それを今あらためて直七と鶴吉の口から詳しく説明されたのである。

「まあ、親分。そういうわけでございます」と、直七は鶴吉をみかえりながら云つた。

「それをこの鶴さんと阿母おつかさんがたいへんに残念がつていゝのです。殊におつかさんはしつかり者ですから、どうしても此のままには済まされないと云つています。娘のかたきばかりじゃあない、御主人のかたきだ。福田の殿さまには長年お世話になつてゐる。今度お屋敷が潰れたについて、御用人も御家来衆もみんな勝手に何処へか立ち去つてしまつて、主人のかたきを探そうとする者もないのは、あんまり口惜くやしい。百姓でも町人でも、かたき討ちは天下御免だ。お前がその伝蔵をさがし出して、殿さまと姉さんのかたき討ちを立派にしると、鶴さんに云い聞かせたのです」

勝氣の母に激励されて、魚屋の若い息子は主人と姉のかたき討ちを思い立つた。その以

来、鶴吉は麴町八丁目の町道場へかよって、劍術の稽古をしていると云う。彼が瓦版を熱心に眺めていたのは、自分にもかたき討ちのしたころ下したころ心がある為であったことを半七は初めて覚った。

「そこで、親分さんにお願いでございますが……」と、直七は云いつづけた。

「おつかさんも鶴さんも一生懸命に思い詰めているのですから、まあ助太刀をしてやるとおぼしめ思召して、自分の衆にでも云いつけて、その伝蔵のありかを探してやっていただくわけには参りますまいか」

「何分お願い申します」と、鶴吉も畳に手をついた。

「いや、判りました」と、半七はうなずいた。「成程。おつかさんの云う通り、一季半季の渡り中間なんぞは格別、かりにも侍と名の付いている用人や家来たちが、あと構わずに退転してしまうというのは、どうも面白くねえようだ。だが、おまえさんが自分でかたき討ちをすると云うのも、ちつと考えものだ」

鶴吉は福田の屋敷の家来でない。主人の妾の弟に過ぎないのであるから、表立って主人のかたきと名乗り掛けるのは無理であろう。姉のかたきと云えば云われるが、伝蔵のような罪人は公儀の手に召し捕らせて、天下の大法に服させるのが当然であって、私のかたき

討ちをすべきでは無いと、半七は云い聞かせた。

「親分のお諭しさしはご尤もでございますが、あの伝蔵を自分の手で仕留めなければ、わたしの気が済みません。母の胸も晴れません。首尾よく本望を遂げました上は、自分はどうな仕置になつても厭いません」と、鶴吉は飽くまでも強情ごうじょうを張つた。

一途いちずに思いつめた若い者に対して、半七はいろいろに理解を加えたが、彼はどうしても肯かないのである。しかも半七はその強情を憎むことも出来なかつた。

「それほど思い詰めたら仕方がねえ。まあ、思い通りにかたき討ちをおしなせえ」

「有難うございます。ありがとうございます」と、鶴吉は涙をながして喜んだ。

「そこで、その伝蔵のありかを突き留めて、わたしらの手で押さえるならば仔細はねえが、おまえさんの手で討つとなると、仕事がちつと面倒だ。伝蔵という奴は腕が出来るのかえ」と、半七は訊いた。

「なに、たいして出来る奴でも無さそうですが……」と、直七が引き取つて答えた。「それが主人を一刀で斬つて、つづいてお関さんも斬つてしまうと云うのは、あんまり手ぎわが好過ぎるようにも思われます。それには何だか因縁がありそうで……。ねえ、鶴さん」

「母は因縁だと申していますが……」

「どんな因縁だね」と、半七は又訊いた。

「今時いまときこんなお話をいたしますと、他人ひとさまはお笑いになるかも知れませんが……」と、鶴吉は躊躇しながら云った。「伝蔵は主人の枕元にある脇指わきざしで斬つたのですが、その脇指が吉良上野殿こうずけの指料さしりょうであつたと云うことです。その由来は存じませんが、先祖代々伝わっているのだそうです」

「先祖伝来はともかくも、好んでそんな物をさすと云うのは、よつほどの物好きだね」

「物好きといえば物好きです。吉良の脇指というので、代々の殿さまは差したこともなく、土蔵のなかに仕舞い込んであつたのを、先年虫ぼしの節に、今の殿さまが御覧になつて、どこが気に入つたのか、自分の指料にすると仰しやいました。そんな物はお止めになつたが好かろうと云つた者もありましたが、殿さまはお肯ききになりません。それは刀が悪いのではなく、差し手が悪いのだ。吉良が悪いから討たれたのだ。おれは吉良のような悪い事はない、吉良の良い所にあやかつて四位の少将にでも昇進するのだなぞと仰しやつて、とうとうその脇指を自分の指料になさいました。それから四、五年のあいだは何事もなかつたのですが、凶はからずも今度のようなことが出しゅつ来たいしまして、殿さまも姉もその脇指で殺されました。姉はふだんから其の脇指のことを気にして、吉良の脇指なんぞは

縁起が悪いと云つていましたが、やっぱり虫が知らせたのかも知れませんが」

「刀の祟りということは、昔からよく云いますが、吉良の脇指なども良くないのですね」と、直七は仔細らしく云つた。

「吉良の脇指も村正と同じことかな」と、半七はほほえんだ。「そこで、その脇指はどうなつたね。伝蔵が持ち逃げかえ」

「いえ、庭さきに捨ててありました」と、鶴吉は云つた。「お屋敷の後始末をする時に、こんな物はいよいよ縁起が悪いから、折つてしまふとか云うことでしたから、わたくしがお形見に頂戴いたして参りました。わたくしはそれで伝蔵を討ちたいと思いますが、いかがでしょう」

「それもよからう。吉良の脇指でかたき討ちをしたら、世の中も変つたものだど、泉岳寺にいる連中が驚くかも知れねえ」

冗談は冗談として、半七は年の若い鶴吉に同情した。おなじ刀で相手を仕留めれば、それは本当のかたき討ちである。刀屋に渡してせいぜい研とがせておくと、半七は彼に注意して別れた。

麴町から四谷へまわつて、半七が神田の家へ歸つたのは、冬の日の暮れかかる頃であつた。湯に行つて、ゆう飯を食つてしまふと、善八が来た。

「季節になつたせいか、寒さがこたえますね」

「御同様に歳の暮れというものは暖くねえものだ」と、半七は笑つた。「その節季に気の毒だが、一つ働いて貰いてえ事がある。急ぎと云うものでもねえが、急がねえでもねえ。まあ、せいぜいやつてくれ」

「なんですな」

「かたき討ちの助太刀と云つたような筋だ」

「芝居がかりですな」と、善八も笑つた。

「こういうことになる、おれもちつと芝居気を出したくなる。本当ならばこむそう虚無僧にでも姿をやつして出るところだが、真逆まさかにそうも行かぬ。まあ、聴いてくれ」

吉良の脇指の一件を聴かされて、善八はうなずいた。

「成程、こりゃあいよいよお芝居だ。そこで、先ずどこから手を着けますな」

「この一件は四谷の常陸屋の係りだ。如才じよさいなく、ひと通りの探索はしているだろうが、こつちはこつちで新規に手を伸ばさなけりやあならねえ。直七と鶴吉の話によると、その伝蔵という奴は秩父の生まれだそうだが、一文無しで故郷へ帰ることも出来めえ。といつて、江戸にいるのもあぶねえと云うので、どつかへ草鞋わらじを穿はいたかも知れねえ。なにしろ三月も前のことだから、その足あとを尾つけるのがちつと面倒だ」

「伝蔵と係り合いの女はどこにいるでしょう」

「それはお熊という女で、年は十九、宿は堀江だそうだ」

「堀江とは何処ですな」

「下しも総もうさの分だが、東葛飾ひがしかつしかだから江戸からは遠くねえ。まあ、行徳ぎょうとくの近所だと思えばいいのだ。そこに浦安うらやすという村がある。その村のうちに堀江や猫実ねこざね……」

「判りました。堀江、猫実……。江戸から遠出の釣りや、汐干狩に行く人があります」

「そうだ、そうだ。つまり江戸川の末の方で、片ぽ方は海にむかっている所だ。むかしは堀江千軒と云われてたいそう繁昌した土地だそうだが、今は行徳や船橋に繁昌を取られてよつぽど寂さびれたということだ。漁師町だが、百姓も住んでいる。お熊はその宇兵衛という百姓の妹だそうだ。そこで、おれの鑑定じゃあ、お熊が八月に屋敷を出された時、いずれ

伝蔵がたずねて行くという約束でもあって、伝蔵は主人の金をぬすんで逃げ出そうとしたのだらう」

「そうすると、伝蔵はお熊の宿に隠れているのでしうか」

「さあ、そこだ」と、半七は首をかしげた。「望み通りに金を盗めば、堀江までたずねて行つたらうが、これも一文無しじゃあどうだらうか。第一、お熊がすぐに国へ帰つたか、それとも江戸のどつかに奉公して伝蔵のたよりを待っているか、それも判らねえ」

「堀江まで踏み出しても無駄でしょうか」

「無駄かも知れねえ。だが、無駄と知りつつ無駄をするのも、商売の一つの道だ。さしあたって急用もねえから、念晴らしに明後日あさってあたり踏み出してみるかな」

「おまえさんも行きなさるかえ」

「道連れのある方が、おめえもさびしくなくて好かろう。行くなれば、深川から行徳まで船で行くほうが便利だ。ちつと寒いが仕方がねえ。朝は七ツ起きだ」

「じゃあ、そうしましょう」

約束をきめて、善八は帰った。

その翌々日の朝は、江戸の町にも白い霜を一面ににおいていた。半七と善八は予定の通り

に、行徳がよいの船に乗り込んで、まず行徳の町に行き着いた。ここらの川筋はよい釣り場所とされているので、釣り道具などを宿屋へあずけて置いて、江戸からわざわざ釣りに行く者も少なくないので、宿屋でも心得ていて、釣り舟や弁当の世話などをする。そのなかでも、伊勢屋というのが知られているので、半七らも此処へはいることにした。

宿屋へはいると、ひと足さきへ来て脚絆きやはんをぬいでいる男があった。

「やあ、三河町の親分、不思議な所で……」と、男は見かえって声をかけた。

彼は下谷の御成道おなりみちに店を持つている遠州屋才兵衛という道具屋である。もっぱら茶道具をあきなつて、諸屋敷へも出入りしているだけに、人柄も好く、行儀もよかつた。

「まったく不思議な御対面だ」と、半七も笑つた。「お前さんはこんな所へ何しに来なすつた。寒釣りかえ」

「なに、そんな道楽じゃありません。これでも信心参りで……。五、六人の連れがありましたので、成田なりたへ参詣して来ました」

「それにしても、途中から連れに別れて、ひとりでここへ来なすつたのか」

「まあ、そんなわけで。へへへへへ」

才兵衛は何か独りで笑つていた。おなじ二階ではあるが、裏と表と別々の座敷へ通され

て、半七らが先づくつろいで茶を飲んでいると、如才しよさいのない才兵衛はすぐに挨拶に来て、おめずらしくはありませんがお茶菓子にと、成田みやげの羊羹などを出した。

「そこで、お前さん方は……」と、才兵衛は声をひくめた。「なにか御用で……」

「まあ、用のような、遊びのような……」と、半七はあいまいに答えた。「ここらは大そう釣れると云うから……」

「じゃあ、やつぱり釣りですか。わたくしも一度、近所の人に誘われて、ここへ釣りに来たことがあります。しかし何処へ行つても、下手は下手で……」

釣りの失敗話などをして、才兵衛は自分の座敷へ帰った。そのうしろ姿を見送って、善八はささやいた。

「あいつ、成田から帰る途中、ひとりでここへ廻つて来たのは、なにか堀り出し物のあてがあるんですぜ」

「まあ、そうだろう。あいつも商売にやあ抜け目がねえからな」

女中に訊くと、才兵衛はすぐに又どこかへ出て行ったとの事であったが、善八はすこし風邪を引いていると云い、海辺の風は殊に寒いというので、半七らはどこへも出ずに一泊した。

あくる日は風も凪いで、十二月にはめずらしい程のうらかな日和ひよりとなった。ここから一里あまりの堀江までは、陸おかでも舟でも行かれるのであるが、半七らは陸を行くことにして、あさ飯の箸を置くとすぐに宿を出た。出るときに又もや才兵衛に逢った。彼も堀江へ行くと云うので、三人は一緒にぶらぶらあるき出した。

才兵衛は例の通りに、如才なく話しながら歩いてきたが、なんだか半七らの道連れになるのを厭うような様子が見えた。結局、彼は途中に寄り道があると云って、狭い横道へ切れてしまった。それに頓着せずに、二人は真つ直ぐに進んでゆくと、一方の海は遠い干潟ひがたになっていて、汐干狩にはおあつらえ向きであるらしく眺められた。そこには白い鳥の群れがたくさんに降りていた。土地の人に訊くと、それは白い雁であると教えてくれた。

「なるほど白雁はくがんと云うが、白い雁はめずらしい」と、善八は干潟を眺めているうちに、俄かに叫んだ。「親分、ご覧なせえ。遠州屋の奴め、いつの間には先廻りをして、あんな所をうろ付いていますよ」

指さす方角には彼の才兵衛がうろろうして、砂の上で何か探し物でもしているらしかった。

「まさかに貝を拾っているのもあるめえ、海端うみばたへ出て何をしてやあがるかな」

半七は気にも留めずに行き過ぎた。

堀江へ行き着いて、宇兵衛の家をたずねて、先ずその近所で訊き合わせると、宇兵衛の妹は九月のはじめに江戸から一度帰つて来たが、半月ほどの後に再び出て行つた。宇兵衛はなぜか其の行く先をはつきり云わないが、今度は江戸ではないらしく、船橋の方へ奉公に行つたという噂もあり、八幡やわたの方へ行つたという噂もある。以前の武家奉公と違つて、今度は茶屋奉公に出たので、兄がその行く先を明かさないのである。いづれにしても、お熊が実家に留まつていないのは確かであると近所の人たちは話した。

江戸から誰かたずねて来た者はなかつたかと訊きただすと、お熊がどこへか行つた後、十月の初めに江戸から二人連れの男がたずねて来た。つづいてその月のなかば頃に一人の男がたずねて来て、宇兵衛の家にひと晩泊まつて帰つたと云うのである。魚釣りや汐干狩のほかには、他国の人があまり交通をしない場所だけに、見馴れない人の姿はすぐに眼について、宇兵衛方へたずねて来た二度の旅びとを近所の人達はみな知っていた。

その人相や風俗を詮議すると、初めの二人づれは四谷の常陸屋の子分らが伝蔵とお熊のありかを探りに来たらしく、後の一人は伝蔵自身であるらしかった。

「ともかくも宇兵衛の家うちへ行つてみよう」

半七は先に立つて歩き出すと、冬がれの田のあいだに小さい農家が見いだされた。門かどぐ口ちには大きい枯れすすきの一ひとむら叢むらが刈り取られずに残っていた。

四

すすきの蔭から覗くと、家の構えは小さいが、さのみに貧しい世帯しよたいとも見えないで、型ばかりの垣のなかにはかなりに広い空地あきちを取っていた。葉のない猫柳の下に井戸があつて、女房らしい二十四五の女が何か洗い物をしていた。

案内を求めて、半七と善八が内へはいると、女房は湿ぬれ手をふきながら出て来た。

「宇兵衛さんはお内でしょうか」と、半七は丁寧に挨拶した。「わたし達は江戸の者で、成田さまへ御参詣に行った帰りでございます。これはほんのお土産のおしるしで……」

善八に風呂敷をあげさせて、取り出した羊羹二本はきのうの貰い物であった。見識らぬ人のみやげ物を迂濶まがに受け取つていいか悪いかと、その判断に迷つたように、女房は手を出しかねて、二人の顔を眺めていた。

「宇兵衛さんはお内ですか」と、半七は重ねて訊いた。

「居りますよ」と、女房はやはり不安そうに答えた。

この時、裏の畑からでも引き抜いて来たらしい土大根二、三本をさげて、二十八九の男が井戸端に姿をあらわした。女房は駈け寄って何かささやくと、男も不安らしい眼を据えて半七らをじつと窺っていたが、やがて大根を井戸ばたに置いて、門口に出て来た。

「宇兵衛は私ですが、おまえさん方はお江戸から来なすつたのかね」

「ええ、今もおかみさんに云つた通り、成田さまへ御参詣に行つた帰り道に、ちよいとおたずね申しました。以前番町のお屋敷に御奉公していたお辰さんに頼まれて……」

お辰というのはお熊の故朋輩もとしで、福田の屋敷が滅亡の後、四谷のお城坊主の家へ奉公換えをした者である。その名は宇兵衛も聞き知っていたと見えて、俄かに打ち解けたように会えしやく釈した。

「ああ、そうでしたか。番町のお屋敷に御奉公中は、妹めがいろいろ御厄介になりました。そうで……。まあ、どうぞこちらへ……」

正直者らしい宇兵衛は、うたがう様子もなしに半七らを内へ招じ入れた。

「いや、構わないで下さい。わたし達は急ぎますから」と、半七は入口に腰をかけた。

「早速ですが、お熊さんはどうしました。お辰さんもそれを心配して、わたし達に訊いて

来てくれと頼まりましたが……」

「御親切にありがとうございます」と、宇兵衛も丁寧に頭を下げた。「それではお前さんも大抵のことは御承知でございませうが、お熊の奴め、飛んでもねえ心得違いを致しまして、なんとも申し訳ございません」

「若けえ者だから仕方がないようなものだが、それからいろいろのことが出しゅったい来したらしいね」

「わたしも実にびっくりしました。九月のはじめにお熊が戻って来まして、始めは隠していましたが、どうも様子がおかしいので、だんだん詮議いたしますと、実はこうこう云うわけでお暇になったと白状いたしました。相手はどんな人か知らないが、お中間なんぞと係り合ったところで行く末の見込みは無いと、女房からも私からもよくよく意見を致しましたら、当人も眼が醒めた様子で、その男のことは思い切ると申していました。しかし田舎に帰っていても仕様がなから、もう一度お江戸へ奉公に出してくれと云いますので、わたし達はなんだか不安心に思いましたが、当人がしきりに頼みますので、とうとう又出してやることになりました。お熊はまったく思い切ったようで、万一その伝蔵という男がたずねて来ても、わたしの行く先を教えてくださいるなど頼んで出ました」

「今度は江戸へ出て、どこへ奉公しているのだね」

「下谷の遠州屋という道具屋さんで……」

「遠州屋……」と、半七は善八と顔をみあわせた。そこらをうろ付いている道具屋才兵衛の店に、お熊が奉公していようとは、まことに不思議な廻り合わせであった。

「それから小ひと月も立ちまして、十月の十日とおぼえてとおかいます」と、宇兵衛は話しつづけた。「お江戸から御用聞きの方が二人づれでお出でになりました、お熊はどうした、伝蔵は来ているかという御詮議で……。だんだんのお話をうかがいまして、実におどろきました。伝蔵という男は、まあ何という奴か。妹にも早く思い切らせて好かったと、その時つくづく思いました。ところが、お前さん。それから五、六日の後に、その伝蔵がたずねて来ましたので、わたし達はぎよつとしました」

「そこで、どうしたね」

「伝蔵はもう近所で探つて来た見えまして、お熊のいない事を知っていました。どこへ行つたと頻りに訊きましたが、わたし達は知らないと言いつつてしまいました。お熊は断わりなしに家出をして、今どこにいるか判らないと、飽くまでも強情を張り通しました。それでは今夜だけ泊めてくれと云いまして、ここの家うちにひと晩泊まりまして、あくる朝出

るときに路用の金を貸してくれと云いましたが、わたし達の家に金なぞのある筈はありません。それでも幾らか貸せとゆすりますので、錢三百をかき集めてやりました」

「それで、おとなしく立ち去ったのか」

「お尋ねの身の上だから、うかうかしてはいられないと、自分でも云っていました」

本来ならば、伝蔵が一泊したのを幸いに、宇兵衛から村役人に訴え出るべきである。それをそのままにして、しかも幾らかの錢を貸してやったのは、自分の重々の落度であるが、何分にも伝蔵が恐ろしくて、どうすることも出来なかつたと、宇兵衛夫婦は云った。

「伝蔵はどこへ行くとも云わなかつたかえ」

「別に何とも云いませんでした。度胸がいいのか、その晩は高たかい 躰びぎで寝ていました」

ここまで話して来た時に、門かど 口ぐちの枯れすすきの蔭から内を覗く者がある。それが彼の遠州屋才兵衛であった。半七らと顔をあわせて、才兵衛は困つたらしかつたが、半七らも少し困つた。お辰の使だなどと云つて来た、その化けの皮が忽ち剥けてしまうからである。勿論、いよいよとなれば、正体をあらわすまでの事であるが、これまで聞けば用はないと思つたので、半七は立ち上がった。

「誰かお客があるようだ。わたしはこれでお暇いとまとしましょう」

「どうもお構い申しませんで……。お辰さんに宜しく仰しやって下さい」

宇兵衛夫婦に送られて門口へ出ると、今さら逃げる訳にも行かない才兵衛がそこに突っ立っていた。

「やあ、お前さんもここへ来たのかえ」

云い捨てて半七はすたすたと行き過ぎた。善八も無言でつぶいて来た。やがて七、八間も田圃道たんぼみちを通り抜けた時、善八はあとを見かえりながら云った。

「親分。あの遠州屋はなんだか変な奴ですね」

「自分のくれた成田の羊羹が、あすこに置いてあるので驚いたろう」と、半七は笑った。

「何しに来たのでしょうか」

「お熊は遠州屋に奉公していると云うから、まんぎら縁のねえ事もねえが、なんでわざわざ寄り道をしやあがったかな」

「今の話を聞くと、常陸屋の奴らがここへ詮議に来たと云うじゃありませんか」と、善八は考えながら云った。「そうすれば一応は遠州屋の奉公さきへも行って、お熊を調べたろうと思います。主殺しの伝蔵に係り合いのあると知れたらば、遠州屋でもすぐに暇を出しそうなものだが、相変らず平気で使っているのでしょうか」

「遠州屋は四十ぐらいだろうな」

「そうでしょう。四十面づらをさげて、女房もあり、娘もあるくせに詰まらねえ女なんぞに引つかかって、たびたびぼろを出すという評判ですよ。あいつ、お熊にも手を出しているのじゃありませんかね」

「むむ、笹川の息子の話じゃあ、お熊というのは汐風に吹かれて育ったにも似合わねえ、色の小白い、眼鼻立ちの満足な女だそうだ」

「それだ、それだ」と、善八は肩をゆすつて笑った。「親分、きつとそうですよ。女房にようぼの子の手前があるから、どっかの二階へでもお熊を預けて置くつもりで、兄きの所へその相談に来たのかも知れませんぜ。節季せつきしわす師走のんきに暢気な野郎だ」

「だが、羊羹を持つているところを見ると、成田へは行ったのだろう」

「そう云わなけりやあ家うちを出られねえから、柄にもねえ信心参りなぞに出かけたに違げえねえ。あの貉野郎むじな、途中で連れに別れたなんて云うのは嘘の皮で、始めから自分ひとりですよ」

「まあ、そう妬やくなよ」

「妬くわけじゃあねえが、あいつは方々の屋敷へいい加減ないか物をつぎ込んで、あこ

ぎな銭ぜにもうけをするという噂で、道具屋仲間でも泥棒のように云われている奴ですからね」
 善八にさんざん罵倒されているのも知らずに、才兵衛は宇兵衛夫婦を相手に、今ごろ何を掛け合っているかと半七は考えた。

五

嘉永六年の冬は暮れて、明くる年の七年の春が来た。歴史の上では安政元年と云うが、その年号が安政と改まったのは十二月五日のことであるから、その当時の人はやはり嘉永七年と云っていた。この正月は晴天がつづいて、例年よりも暖かであった。

福田の屋敷には伝蔵のほかに、乙吉、鎌吉、幸作という三人の中間があつたが、滅亡の後には思い思いに立ち退のいて、諸方の武家屋敷に奉公している。その奉公先へ伝蔵が立ち廻るようなことは無いかと、半七は子分に云いつけて絶えず警戒させていたが、彼はどこへも姿を見せなかつた。遠州屋のお熊のところへ尋ねて来たような形跡もなかつた。

一月の末になって、自分の幸次郎がこんなことを報告した。

「伝蔵はやつぱり江戸にいますよ。福田の屋敷にいた曾根鹿次郎という若侍が、当時は牛

込神楽坂辺の坂井金吾という旗本屋敷に住み込んでいます。その曾根が二、三日前に小梅の光隆寺へ墓参に行きました。光隆寺は福田の屋敷の菩提寺ですから、命日というわけじやあねえが、曾根も勤めの暇をみて、旧主人の墓参りに行つたのです。参詣を済ませて寺を出ると、どこから尾^つけて来たのか伝蔵が門の前に待っていて、自分はお尋ね者で商売に取り付くことも出来ず、その日にも困っているから、幾らか恵んでくれと云つたそうです。そのずうずうしいには、曾根も呆れました。たとい昔の知りびとに出逢つても、顔を隠して逃げるのが当然なのに、自分の方から声をかけて、いくらか貸せとゆするとは、まったく思い切つてずうずうしい奴です。曾根も腹立ちまぎれに斬つてしまおうかと思つたのですが、自分も今は主人持ちですから、旧主人のかたきを討つというのは少し面倒です。取り押さえて番所へ突き出そうと思つて、不意にその利き腕をとつて捻じあげると、伝蔵もなかなか腕^つ節の強い奴で、振り払つて掴み合いになりましたが、あの辺は路が悪い、霜どけ道に雪踏^{せつた}をすべらせて、曾根が小膝を突いたところを、伝蔵は突き放して一目散に逃げましたそうです」

「成程、主殺しでもするだけに、思い切つてずうずうしい奴だな」と、半七も呆れたように云つた。「馬鹿か、凶太いのか、なにしろそんな奴じゃあ、何処へのそのそ這い出して

来るかも知れぬえ。江戸にいと決まったら、尚さら気をつけてくれ」

それから十日ほどの後に、善八がこんなことを聞き出して来た。

「麹町四丁目の太田屋という酒屋は、福田の屋敷へ長年の出入りだったそうです。その女房が娘と小僧を連れて、王子稲荷の初はつうま午へ参詣に行くと、王子道のさびしい所で、伝蔵に出逢ったそうです。これも同じような文句をならべて、お尋ね者で喰うに困るから幾らか恵んでくれと云う。こつちは女子供だから、怖いのが先に立って、巾着銭をはたいて二朱と幾らかを捲き上げられたそうですよ。いよいよ凶太い奴ですな」

主殺しのお尋ね者が世間を憚らず、この江戸市中を徘徊して昔むかしなじみ馴染をゆすつて廻るなどは、重々不埒な奴であると半七は思った。

「そんな奴をのさばらせて置くと、上の威光にかかわるばかりか、おれ達の顔にもかかわる。本気になって早く狩り出してしまえ」

それから又四、五日の後に、亀吉から新しい報告があつた。

「福田の屋敷に勤めていたお辰という女は、このごろ四谷坂町まちの奥平宗悦というお城坊主の家に奉公しています。そのお辰が二、三日前の晩に、主人の使で塩町ちようまで出て行く途中、例の伝蔵に取つ捉まつて、主人の買い物をする金を取りあげられた上に、そこらの空地へ

引き摺り込まれて、お熊の居どころを教えろと責められたそうですよ。お辰は知らないと言つても、伝蔵は承知しねえ。しまいにはお辰の喉のどを強く絞めて、さあ隠さずに云えと責め立てているところへ、近所の若侍が二、三人通りかかったので、伝蔵もあわてて逃げて行つたが、お辰は半死半生になつて倒れてしまったそうです。ここらは常陸屋の縄張りだから、それを聞いてすぐに網を張つたが、伝蔵の姿はもう見えなかつたそうで、常陸屋でも口惜くやしがつていと云うことですよ」

「仕様がねえな」と、半七は舌打ちした。「そこで、そのお熊はどうした。相変らず遠州屋にいるのか」

「相変らず道具屋に勤めています」

「それじゃあ何処からか嗅かぎつけて、伝蔵は遠州屋へたずねて来るかも知れねえ。善八と相談して、その近所を見張つている。だが、伝蔵を召し捕つても、すぐに番屋へ引き摺つて行つちやあいけねえ。おれに一応知らせてくれ」

「承知しました」

こうして油断なく網を張っていたのであるが、禍いは意外のところしょうでんしたに起こつた。二月二十一日の夜の五ツ半（午後九時）頃に、遠州屋の主人才兵衛は浅草のしょうでんした聖天下で何者に

か殺害された。短刀かあいくち首で脇腹を刺されたのである。所持の財布の紛失しているのを見ると、おそらく物取りの仕業であろうという噂であった。

浅草の今戸いまどには、日本橋の古河という大きい鉄物屋かなものやの寮がある。才兵衛はそこへ茶道具類を見せに行つて、その帰り途中で災難に逢つたのである。聖天へ夜参りをしたのもあるまいに、なぜ待乳山まつちやまの下まで踏み込んだのか、その仔細は判らなかつたが、才兵衛に似たような人物が一人の男と何か云い争いながら通るのを見た者があると云うので、かれらは何かの話でここへ踏み込んだらしく、したがつて普通の物取りではあるまいという噂も生まれた。

才兵衛の検視に半七は立ち会わなかつたが、その下手人は大抵想像された。その噂を聞いて、彼は善八と一緒に御成道の遠州屋へ乗り込むと、才兵衛の死骸はまだ引き渡されていないと見えて、店の番頭らは帰つて来なかつた。

家内の者を遠ざけて、半七は女中のお熊を店さきへ呼び出した。お熊は明けて二十歳はたちで、色の白い大柄の女であつた。

「おまえはお熊か。なんでも正直に云え。この頃に伝蔵は来なかつたか」と、半七はだしぬけに訊いた。

「参りました」と、お熊は素直にはきはきと答えた。「おとこの晩、町内のお湯屋へ参りますと、その帰りに伝蔵に逢いました」

「伝蔵はなんと云った」

「おれと一緒に逃げろと云いました」

「どこへ逃げるのだ」

「それは申しません。これから一緒に逃げるから、自分の金や着物を持ち出して来いと云つただけでございます」

「おまえは何という返事をした」

「いやだと断りました。お前のような恐ろしい人と一緒には行かれないと申しました」

「それで伝蔵は承知したか」

「その恐ろしい事をしたのもお前の為だ。どうしても肯かなければ、主人もお前も唯は置かないぞと、怖い顔をして嚇かしました」

「なぜ主人を恨むのだ」

お熊は少しく返答に躊躇した。

「お前の主人は伝蔵に恨まれるような筋があるのか」と、半七はすかさず訊いた。

「あの人は思い違いをしているのでございます」と、お熊は低い声で答えた。

「思い違いじゃあるめえ」と、半七は笑った。「恨まれるだけの因縁があるのだろう。さもなければ、主殺しの兇状持ちに係り合いのあつた女を、そのまま奉公させて置く筈があるめえ」

「昔のことは構わないから、ここうちの家うちに勤めていろと主人が申しました」

「そう云うには訳があるだろう。おれはみんな知っている。ここうちの主人は去年の暮れ、なんで堀江まで出かけたのだ」

よく知っていると言うように、お熊は半七の顔をみあげた。しかも彼女は案外に平気であつた。

「旦那は商売のことです……」

「商売の事とは何だ」

「がん はね雁の羽を取りに……」

「雁の羽……」

半七は訊き返した。勝手ちがいの返事をされて、彼もやや戸惑いの形であつた。雁の羽がなんの役に立つのか、彼もさすがに知らなかつた。

「はい。お茶の湯に使います」と、お熊は説明した。

世間のことはなんでも心得ているように思ったが、残念ながら半七は茶事に暗かった。彼は我を折つて又訊いた。

「雁の羽をどうするのだ」

「三つ羽箒ばほうきにいたします」

堀江に育つて、今は茶道具商売の店に奉公しているだけに、お熊は雁の羽について説明をして聞かせた。堀江の洲すにはたくさんの雁が降りる、そのなかに白い雁のむらがついてるのは珍らしくないが、稀には斑ふ入りの雁がまじっている。茶事に用いる三つ羽箒には野雁やんの尾羽を好しとするが、その中でも黒に白斑のあるのを第一とし、白に黒斑のあるのを第二とし、数寄者すきしやは非常に珍重するので、その価も高い。ひと口に羽と云つても、翼の羽ではないけない、必ず尾羽でなければならぬと云うのであるから、それを拾うのは容易でない。お熊の兄の宇兵衛は堀江の浜で偶然に拾つて、白斑と黒斑の尾羽をたくわえていた。なにかの時に、お熊がその話をする、主人の才兵衛は眼を丸くして喜んだ。いずれそのうちに堀江をたずねて、お前の兄からその尾羽を譲つて貰うと云つていたが、その年の暮れ、才兵衛は来年が四十一の前まえ厄やくに当たると云うので成田の不動へ参詣に行つて、そ

の帰り道に堀江の宇兵衛をたずね、お熊の主人という縁をたどって、首尾よく雁の羽を手に入れて来たのである。そればかりでなく、今後とも注意してその尾羽を拾い集めてくれと、才兵衛はくれぐれも頼んで帰った。

才兵衛が堀江をうろ付いていた仔細は、これで判った。兇状持ちに係り合いのある女を、彼がそのまま雇っていたのは、色恋の為ではなくて慾の為であった。商売に抜け目のない彼は、お熊の縁をつないで置いて、その兄から高価の尾羽を仕入れようと目論もくろんでいたのであった。彼が半七らと道連れになるのを避けたのも、商売上の秘密を知られたくない為であつたらしい。しかし半七らばかりでなく、伝蔵もまた同様の感違あやまいをして、お熊と才兵衛とのあいだには主従以上の関係があるように疑つたのである。

「お前は伝蔵にその云い訳をしたのか」と、半七は訊いた。

「なにしろ宵の口で、人通りの多い往来ですから、詳しい話は出来ません。わたくしは飽くまでも忌だと云つて、振り切つて逃げて来ました」

「伝蔵は追つかけて来なかつたか」

「今も申す通り、往來の絶え間がないので、それつきり付いても来ませんでした」

「そのことを主人に話したか」

「きまりが悪いので黙っていました」

感違いをしている伝蔵は、一途いちずに才兵衛を恋のかたきと睨んで、その出入りを付け狙っていたらしい。彼は才兵衛が今戸の寮から帰る途中を待ち受けて、無理に聖天下のさびしい場所へ連れ込んで、かれこれ押し問答の末に、その兇暴性を発揮したものと認められた。福田の屋敷に関係のある者のうちに、お熊が現在の奉公先を知っているものは無い筈であるから、伝蔵は誰の口から聞き出したのでもなく、偶然の通りすがりにお熊のすがたを発見したらしかつた。

「わたくしから、こんな事が出しゅったい来まいしまして、御主人さまに申し訳がございません」と、お熊は泣いていた。

六

遠州屋才兵衛を殺した下手人は伝蔵と認定されたが、そのゆくえは判らなかつた。才兵衛がその夜今戸の寮へ出向いたのは、斑入りの雁の羽を売り込みに行ったのであるという事が判って、半七らは一種不思議の因縁が付きまどっているようにも思った。

江戸の花が散り、ほととぎすが啼き渡る頃になつても、伝蔵という悪魚は網に入らなかつた。春の末から半七らはかの「正雪の絵馬」の一件に係り合うことになつて、六月十一日に犯人重兵衛を取り押さえたが、同時に淀橋の火薬製造所が爆発した為に、子分の亀吉と幸次郎は負傷した。半七は幸いに無事であつたが、その後二、三日は疲れて休んだ。その顛末は今ここに繰り返すまでもない。

亀吉の傷は軽かつたが、幸次郎の痛みどころはかなりに手重いので、六月二十八日の朝、半七は幸次郎の家へ見舞いにゆくと、その帰り道で又もや瓦版の読売に出逢つた。それは二十六日の夜、日本橋住吉町ちようの往来で、常陸国ひたち中志築村の太田六助が父のかたき山田金兵衛を討ち取つた一件である。

「又かたき討ちか」と、半七はつぶやいた。

笹川の鶴吉はこの瓦版を買つて、又もや一心に読んでいるであらう。それを思いやると、半七の胸は鉛のように重くなつた。鶴吉は勿論、飼葉屋の直七も定めて頼み甲斐のない奴と、自分を恨んでいるかも知れない。半七は暗い心持で、夏の日盛りの町をあるいて歸つた。

七月になつて、鶴吉が中元の礼に來た。半七はその顔を見るのが辛かつた。

「まったくお前さんにやあ申し訳がねえ」と、半七は詫びるように云った。「わたしも決して油断しているわけじゃあねえが、なんにも手がかりが無いので困り抜いています。まあ、もう少し辛抱しておくんなせえ」

「その御挨拶では恐れ入ります。先月の住吉町のかたき討ちなぞは、九つの時に親を殺されて、二十年もかたきを狙っていたのだと申します。それを思えば、私などはまだ一年にもなりませんのですから……」

鶴吉は果たして瓦版を読んでいたのである。ことしは新にい盆ぼんであるから、殿さまと姉の墓まいりに行くなどと、彼は話して帰った。折りから表を通る燈籠売りの声も、きょうの半七には取り分けてさびしくきこえた。

「畜生、どこに隠れていやあがるか」

いたずらに苛いら々いらするばかりで、半七も手の着けようが無かった。この春ごろは折々に姿をあらわして、昔の知りびとをゆすり歩いていたが、かの才兵衛の一件以来、伝蔵の消息はまったく絶えてしまった。或いは才兵衛のふところから相当のまとまった金をうばつて、それを路用に高飛びをしたのでは無いかとも思われた。

七月九日、きょうは浅草観音の四万六千日にちである。苦しい時の神頼みと云ったような心

持もまじって、半七は朝から参詣の支度をした。

「おい、お仙、すこし小遣いを出してくれ」

「あいよ」

女房のお仙は用箆笥のひき出しから、一步銀に一朱銀を取りまぜて掴んで来た。

「このくらいでいいかえ」

「むむ。よかろう。お台場が大分まじっているな」

「お台場は性が悪いと云うから、なるだけ取らない事になっているのだけれど……」

「おれ達の家うちの金は、きよう有つて明日あしたねえのだ。性が良くつても悪くつても構うものか」

半七は笑いながら一朱銀を受け取つて、今更のように手の上で眺めた。改めて註するまでもなく、異国の黒船防禦のために、幕府では去年の九月から品川沖にお台場を築くことになった。空前の大工事であるから、その費用もおびただしい。その財政の窮乏を補うために、ことしの一月から新吹きの一朱銀を発行したので、俗にこれをお台場と呼んだ。もちろん急場凌ぎに発行したものであるから、銀の質はすこぶる悪い。台場築造はなかなかの難工事であるので、人足の手間賃も普通より高く、一日一朱という定めで、かのお台場銀を払い渡された。

そのころの流行唄はやりうたに「死んでしまおか、お台場へ行こか。死ぬにや優ましだよ、土かつぎ」とある。お台場人足はいい金にもなるが、まかり間違えば海に沈んで命が無い。実に命がけの仕事であると、世間一般に伝えられていた。そのお台場銀を眺めているうちに、半七はふと何事かを思いついた。

「おれは早く帰るから、留守に誰か来たら待たせて置いてくれ」

云い置いて、彼は早々に出て行つた。観音堂に参詣して、例の唐蜀黍とうもろこしや青ほおずきの中を通りぬけて、午飯ひるめしも食わずに急いで帰ると、善八が待っていた。

「早速だが、善八。これからすぐにお台場へ行つて、人入れの人足部屋を洗つてくれ。おれも今まで気がつかなくつたが、例の伝蔵の奴め、お台場人足のなかにまぎれ込んでいかも知れねえ。どうで長げえ命はねえ奴だ。このごろ流行る唄じゃあねえが、死ぬにや優しだよ土かつぎと度胸を据えて、命がけで荒れえ銭を取つて、うめえ酒の一杯も飲んでいゝるような事がねえとも云えねえ」

「成程そんなことかも知れませんが。じゃあ、早速行つて来ます」

善八はすぐに飛び出した。

「お話は先ずここらで打ち留めでしょう」と、半七老人は云つた。「なぜ早くに気がつか

なかつたかと、今でも不思議に思うくらいです。お台場の一朱銀などは始終見ていくせに、なんにも気がつかずに過ごしていて、ふいと思ひ付くと、それからとんと順序好く運んで行くのも妙です。こうなると、自分の知恵じゃあない、神か仏が知恵を貸してくれたようにも思われますよ」

「伝蔵は人足になっていたんですか」と、わたしは訊いた。

「何百人の人足がはいっているのですが、それを監督する人入れの組々がありますから、それについて調べれば判るわけです。伝蔵は芝の人入れの清吉の組にもぐり込んでいました。なにしろ大勢の人足を使うのですから、どこの人入れでも一々その身許詮議などをしちやあ居られません。手足の満足な人間が使ってくれと云って来れば、構わずにどしどし働かせるのですから、伝蔵のような奴の隠れ家にはお誂え向きで、そこに早く気がつかないのは半七が重々の手ぬかり、まことに申し訳がありません。」

清吉の組にそれらしい奴のいることを調べ出したが、善八は伝蔵の顔を知りませんから、麴町の飼葉屋の直七を連れて行って、そつと首実検をさせると、確かに伝蔵に相違ないと云うのです。そこで、わたくしから清吉に掛け合ひまして、伝蔵を逃がさないように用心させて置きました。もうこうなれば、生洲いけすの魚うおです」

「そこで、かたき討ちの様子は……」

「かたき討ちの様子……。物語らんと座を構えると、事が おおきよう大仰になります、まあ搔いつまんで申し上げれば、その日は七月十二日、朝の五ツ時（午前八時）に笹川の鶴吉は直七付き添いで高輪へ出て来る。鶴吉は吉良の脇指を風呂敷につつんでいました。かねて打ち合わせがありますから、二人は海辺の茶屋に休んで待っている。わたくしは善八と松吉を連れて、清吉の小屋へ出て行きますと、これも打ち合わせがありますから、小屋からは伝蔵を叩き出す。そうして表へ出たところを、わたくし共が寄って取り押さえまして、しかしすぐには縄をかけないで、善八と松吉が伝蔵の両腕を取って、鶴吉の待つている茶屋の前まで引き摺って行きました。わたくしもあとから付いて行って、さあ、伝蔵、覚悟しろ。笹川の鶴吉さんが主人と姉のかたき討ちをするのだと云うと、善八と松吉は捉えていた両手を放してやりました。

こうなったら仕方がない。尋常に覚悟をきめて立派に討たれてやればいいのに、伝蔵は両手をゆるめられたのを幸いに、忽ち摺り抜けて逃げ出そうとする。そこへ鶴吉が飛びかかって、例の脇指で背中から突き透しました。芝居ならば、わたくしが ざがしらやく座頭役で、白扇でも開いて見事見事と褒め立てようと云うところです。わたくしもまあ、これで重荷をお

ろしたような気になりました。

かたき討ちを首尾よく済ませた上で、鶴吉は直七付き添いで番屋へ訴え出ました。わたくし共が付いて行くと事面倒ですから、あくまでも鶴吉ひとりの仇討ということにして、わたくし共は茶屋にひと休みして引き揚げました。前にも申す通り、このかたき討ちには少し無理がありますから、あとの始末がどうなるかと案じていましたが、なにしろ伝蔵の罪科明白なので、^{かみ}上にも相当の手心があつたのでしよう。案外無事に済みました」

「その脇指はどうになりました」

「なんでも笹川の家から福田の屋敷の菩提所、光隆寺へ納めたとか聞きましたが、それからどうなったか知りません。考えてみると、かたき討ちの場所は高輪で、例の泉岳寺の近所、脇指は吉良の物、どこまでも縁を引いているのも不思議で、訳を知らない人が聞いたら、こしらえ話のように思うかも知れません」と、老人は笑っていた。

わたしが暇乞いをして帰る頃には、細かい雪がちらちら降り出した。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（五）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年10月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tat_suki

校正：大野晋

1999年4月27日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

吉良の脇指

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>